「地域力」を生かし、豊かな学びと安心感に満ちた学校をつくる

～三つの取組で挑む！「地域の学校」の創造～

仙台市立南材木町小学校
校　長　伏見　　滋

Ⅰ　主題設定の理由

本校は仙台城下の南に位置し、創立154年目を迎える伝統校である。「人との関わりを大切にする児童生徒」という協働型学校評価目標を掲げ、「児童が安心して学び、保護者が安心して託せ、教職員が安心して働ける『地域の学校』南材小」を「目指す学校像」として定めている。

児童数は283名で、素直で優しいこどもが多い。一方で、様々な要因から不安や悩みを抱えて登校している児童も在籍している。また、現在在籍している児童は幼少期にコロナ禍の影響を受け、就学前に本来体験すべき「人の関わり」や「自然の中で友達と遊ぶ」等の経験が著しく不足したまま入学してきた児童も少なくない。その影響からか、人間関係づくりに苦手意識があったり、地域行事への参加に対して消極的であったりする傾向も一部に見られる。

保護者は学校教育への関心が非常に高く、学校に対して協力的である。一方で、様々な事情で子育てに不安や悩みを抱いている保護者も少なくない。

地域は仙台城下の伝統を今に引継ぎ、歴史的価値が高い建造物や、伝統芸能等に秀でた人材も多く居住し、市内でも有数の高い「地域力」を誇る。地域住民の学校教育への関心は極めて高く、「地元の小学校」への期待は大きい。しかし、近年はコロナ禍の影響もあり、人間関係が希薄になったことに加え、教員の「働き方改革」の名のもとに各種行事や取組が廃止・縮小される傾向にある。本校に限ったことではないが「地域力」が学校教育に生かしきれていない現状に、一人の校長として強い懸念と忸怩たる思いを抱いている。今こそ地域と学校との良好な関係性を再構築し、「地域力」を生かしてこどもを育てることができる「地域の学校」の創造が急務であると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　本実践の目的と意義

本実践の目的は二つある。一つ目は、地域力を学校教育に生かして児童の「豊かな学び」を創出することである。二つ目は地域力を生かして、子育て支援、安全・防災・防犯等に取り組み、学校を「安心感」で満たすことである。

文部科学省は令和5年に閣議決定された国の「教育振興計画」において、「持続可能な社会の創り手」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」という基本方針のもと、①子供たちの学びの場を学校から地域社会に広げていくこと、②社会教育による「学び」を通して人々の「つながり」や「かかわり」を作り出すこと、の重要性を示した。また、仙台市は令和8年3月「仙台市教育基本構想2026」において「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環」をその基本理念として冒頭に掲げ、「まち（地域）で人を育てる」ことの重要性を強調している。本実践は、それらの方針・理念と合致しており、下記に示す取組の柱（三本）に沿って実践を重ね「地域の学校」を創造することは高い意義を持つものであると考える。

Ⅲ　取組の柱（三本）と中心となる実践

【柱１】地域力を生かして「豊かな学び」を創出する取組

【中心となる実践】
①地域人材を生かし、豊かな学びを創出する
②地域力を生かして「ビオトープ」を運用する
③地元大学・地域団体との連携を強化する

【柱２】地域力を生かして学校を「安心感」で満たす取組

【中心となる実践】
①子育てカフェ「南材サロン」を開催する
②地域と協働で防災・防犯・安全活動を推進する
③児童の見守り支援体制を一層充実させる

【柱３】地域との関わりの中で児童を育てる取組

【中心となる実践】
①地域の伝統文化、伝統行事を大切にする
②地域の人と関わる活動を重視する

Ⅳ　取組の内容

【柱１】の中心となる実践

【実践１－ⅰ】地域人材を生かし、豊かな学びを創出する

歴史ある南材木町地域は「人材の宝庫」である。その利点を生かし、地域人材（各分野の専門家）を「ゲストティーチャー」として授業や各種活動に積極的に登用し「豊かな学び」の創出を目指した。「どのような人材が、児童の『豊かな学び』の創出に必要なのか」というテーマについて、学校運営協議会を要として、教職員の話合い、ＰＴＡや地域の会議等で議論を重ね、地域・保護者・学校の三者で方針を共有した。地域在住の「その道のプロ」の「発掘」は、学校運営協議会委員や学校地域連携本部スーパーバイザー(以下ＳＶ)等からの情報を活用して行った。地域人材（ゲストティーチャー)による授業計画については本校教育計画、教育課程との整合性を重視し、その依頼や調整等は教頭及び教務主任（兼地域連携担当）が中心となって行った。大変多くの地域の方から快くご協力をいただき、本校教職員と協働して実践を進めることができた。

「豊かな学び」を創出した地域人材活用（例）

①日本舞踊「坂東流」師範　大町正子 氏　他
内容：日本や地域の伝統文化についての学習・体験
（3～6 年総合的な学習・4～5 年クラブ活動　他）

②地元寺院　浄澤寺住職　小野和徳 氏　他
内容：「まち探検」で故郷「城下町」についての学び
（2 年生活科・3 年社会科　他）

③主任児童委員・八軒中学校 SV　立花裕美 氏
内容：命の大切さについての学習（6 年総合的な学習）

④地域在住で英語に堪能な方
内容：外国語活動の指導（3～6 年外国語）

⑤地域在住で朗読が上手な方
内容：朝の読み聞かせ活動（全学年・業前時間）

日本舞踊の体験（クラブ活動）

地元寺院での学習（まち探検）

【実践１－ⅱ】地域力を生かして「ビオトープ」を運用する

本校のビオトープは令和６年度に完成した。その管理・運用は地域と学校が協働で設立した「ビオトープ委員会」が行っている。委員長は地域の方から選出している。自然に詳しい地域の方と教職員、児童がそれぞれ役割を分担しながらビオトープを管理・運用している。これは本校の独自の特色ある教育活動（仕組み）であり「コミュニティービオトープ」と呼んでいる。ビオトープ運用開始からまだ２年目であるが、児童は教科の学習、自由観察等で毎日ビオトープを活用し、仲間や地域の方とともに自然体験活動に取り組んでいる。地域力を生かした行事の企画や情報発信もあって、コミュニティービオトープの価値はどんどん高まってきている。

コミュニティービオトープ

コミュニティービオトープでの豊かな学び（例）

①地域の大人（ビオトープ委員や自然に詳しい地域の方）からビオトープの生き物等についてアドバイスを受けながら、児童は楽しく学んでいる。
②年度始に「ビオトープ総会」を実施し、児童と教職員・地域がビオトープの活用法について議論し、児童の発想がビオトープの運用に生かされている。
③教科等の学習、休み時間などにビオトープを有効かつ自由に活用できる事で、水辺の生き物や植物についての学びが深まっている。
④地域力を生かした「ビオトープイベント」の開催で、児童の自然への関心がより高まっている。
⑤自然に詳しい地域の方と関わりながら、地域の大人への尊敬や憧れの感情が児童に生まれている。

【中心実践１－ⅲ】地元大学・地域団体との連携

本校周辺に大学が多い利点を生かし地元大学と積極的に連携している。学生は「ボランティア」として登録し授業や休み時間等に児童の見守りや寄り添いの支援を行っている。大学と本校（窓口は教頭）が適切に連絡を取り合い、学生が安心して活動しやすい環境を整備するよう心掛けている。

多くの地域団体とも積極的に連携している。それぞれの団体が持つ高い専門性と特色を学習活動に生かすことで児童の豊かな学びにつながっている。

豊かな学びを創出した地元大学との連携（例）

①宮城教育大、東北学院大、東北福祉大の学生が各教室の授業に「サポーター」として入り、児童一人一人の学習支援が充実した。
②宮城教育大の学生が「研究の場」として本校を活用できる仕組みを整備したことで、学校（児童）と大学（学生）にウイン・ウインの関係が構築された。

豊かな学びを創出した地域団体との連携（例）

①宮城県森林インストラクター協会と連携。「学校の森」の活動を3～6年生で実施した。5年生は毎年、荒浜海岸へ出向き、東日本大震災で被災した松林の再生プログラムを体験した。児童の防災意識向上が図られた。4年生は毎年、利府町の県民の森へ出向き、公園内に常設されている「南材の森」で林業体験を行った。森林の大切さ等について学びを深めた。

②「うぶごえ座」と連携。5年生が親子講座「命の授業」を行い、命の尊さについて学びを深めた。

③「NPOかわらばん」と連携。5年生が「広瀬川環境プログラム」の体験学習を行った。広瀬川（故郷の川）についてより深く学ぶことができた。

④「プレイアート仙台」と連携。6年生が「演劇ワークショップ」（全3回）を実施した。仲間同士で身体表現活動に取り組み「表現の楽しさ」を学んだ。

【柱２】の中心となる実践

【実践２－ｉ】子育てカフェ「南材サロン」の開催

「子は親の鑑（かがみ）」である。保護者の精神的安定が児童の「安心感」には欠かせない。不登校等、子育てに悩みを抱える保護者同士がお茶を飲みながら交流できるスペース「南材サロン」を保護者・地域・学校が協働で開催している。校内の教室を活用し、年数回（令和7年度は5回）開催している。保護者の有志と養護教諭が参加者をとりまとめ、希望者は誰でも気軽に参加できるような環境を整えている。学校からは管理職、養護教諭、スクールカウンセラー等が適宜出席し、参加者と和やかに懇談している。

【実践２－ii】地域と協働で防災・防犯・安全活動を推進する

地域力を生かして防災・防犯・安全等の訓練や学習を推進した。各種訓練はすべて地域団体・関係機関と協働で準備を進め、地元警察、消防、地域団体等が持つ「強み」を生かして実施した。

地域と協働で実施した活動（R7年度の例）

①地域総合防災訓練（R7.10.18実施）
　各町内会、地元消防署ほか地域各団体と協働
②不審者対応訓練（R7.5.30実施）若林警察署と協働
③1年交通安全教室（R7.4.15実施）
　若林区役所・交通指導隊他と協働
④自転車安全教室（R7.4.23実施）若林警察署と協働

【実践２－iii】日常的な児童見守り支援体制の整備

「下町情緒」溢れる本校の学区は、古くから地域住民同士の繋がりが強く、地域住民による児童への日常的な声掛け、見守りが充実している。児童の様子を地域の大人が毎日見守ることができる仕組みを一層充実させ、「地域でこどもを見守る」ことの大切さについて学校便り、地域掲示板等を活用し地域に啓発した。

地域からの日常的な見守り活動とその支援者（例）

①登校時の見守り（防犯ボランティア巡視員他）
②1年児童への支援活動（「南の星サポーター」他）
③支援が必要な家庭、児童の見守り（民生委員他）
④日常的な声掛け・見守り（町内会・老人クラブ他）

【柱３】の中心となる実践

【実践３－ｉ】地域の伝統文化、伝統行事を大切にする

地域に伝わる伝統行事（南材夏祭り等）を町内会、老人会等と協働で実施し、児童が伝統文化に触れる機会を確保した。町内会、老人会等の地域団体と学校が良好な関係を構築するために地域の行事や会合には、教職員の積極的な出席を心掛けた。また地域住民（特に高齢者）と児童が地域行事等で触れ合える場面を多く設定し「地域でこどもが育つ」環境を整備した。

地域の伝統・文化に触れる活動の例（R7年度の例）

①南材夏祭り（R7.7.26実施）町内会・地域各団体と協働
②餅つき会（R7.12.11実施）　老人クラブと協働
③昔あそびの会（R8.1.15実施）老人クラブと協働

【実践３－ii】地域の人と関わる活動を重視する

地域の人との関わりを重視した活動を地域と学校が協働しながら推進した。下表に示した数多くの「地域の人との関わり（体験の場）」は本校の高い地域力の結晶であり、「地域における学びの循環」の土台となっている。「南材おやじ倶楽部」が中心となって実施した夏のキャンプでは地域の大人と共に学校に宿泊し、まさに「一宿一飯」で地域の大人や地元の中高生（ジュニアリーダー）とこどもが深く関わる好機となった。

地域の人との関わりを重視した体験活動（例）

★南材おやじ倶楽部と協働で行う体験活動
①夏のキャンプ（R7.8.9～10　一泊で実施）
②焼き芋会（R7.11.15実施）
③スケート教室（R8.2.14実施）
★八軒中学校との連携
①陸上の練習支援（R7.9実施）
②吹奏楽部の練習支援（通年で実施）
③職場体験活動の受け入れ（R7.8.26～28実施）
★町内会との連携
①広瀬川ふれあい活動（R7.6.28/R7.11.3実施）
②南材夏祭りでの吹奏楽部演奏（R7.7.26実施）

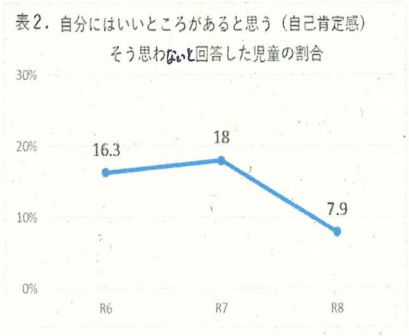
★ビオトープ委員会との連携
①業間ビオトープ（R7.6.16～毎月約１回実施）
②ビオトープ総会（R7.5.21 実施）
③生き物ふれあい観察会（R7.9.9 実施）
★学区体育振興会との連携
①学区民大運動会（R7.5.24 実施）
②夏休みラジオ体操（R7.7.22～24 実施）
★ＰＴＡとの連携
①ＰＴＡスポーツフェスティバル（R7.6.21 実施）
②ＰＴＡバザー（R7.10.25 実施）
③夏休み学校プール開放（R7.7.22～31 実施）
★南材児童館との連携
①新春コンサートでの合唱演奏（R8.1.10 実施）
★地元（河原町）商店街との連携
①河原町マルシェでの合唱演奏（R7.8.3 実施）

Ⅴ　実践の成果

【柱１】地域力を生かして「豊かな学び」を創出する取組について

①地域人材の活用、②「コミュニティービオトープ」の運用、③地元大学・地域団体との連携等の実践は、普段の授業だけでは到達しえない「豊かな学び」を生み出した。授業における一人一人の意欲的な態度や表情、グループ活動での生き生きとした発表等がそのことを証明していた。また、様々な「豊かな学び」の中で、「自分の良さ」に気付き、自分の興味・関心を大切にして学びに向かおうとする児童が増加した。

そのことは仙台市学習状況調査（R8.4.15 実施）の結果にも表れた。「自分にはいいところがあると思うか」という発問に対して、令和７年度までは「そう思わない」とマイナス回答する児童の割合が約 18%であったのに対し、今年度は約 8%まで大幅に減少した。地域力を生かした実践が創出した豊かな学びが、児童の自己肯定感向上にも結び付いたと考察する。(右グラフ参照・６学年)



【柱２】地域力を生かして学校を「安心感」で満たす取組について

「南材サロン」は毎回、和やかな雰囲気で行われ、多くの保護者にとって心のオアシスのような場所となっていた。「一人で悩む」のではなく、学校、地域が子育てに悩む保護者に寄り添える体制が強化されたことは極めて大きな成果である。保護者の心の安定が児童の安心感につながることは言うまでもなく、今後も地域力を生かした子育て支援の輪を広げていきたい。

地域力を生かし、地域と学校が協働で実施した各種活動は地域・学校間に「顔の見える関係」を構築した。また、児童の防災・防犯・安全に対する意識の向上も見られ、児童、保護者の安心・安全にも結び付いた。

日常の見守り活動は特に、児童の朝の登校時の安全確保につながっている。本校児童の登校中の重大な事件・事故等は近年発生しておらず、「朝の安全」は児童を送り出す保護者の安心感につながっている。

【柱３】地域との関わりの中で児童を育てる取組について

教職員以外の大人（地域の方）と関わりながら、様々な体験をすることで、児童の心の成長に結び付いた。幼少期にコロナ禍で体験できなかった「地域の人との関わり・触れ合い」や「仲間と共同で行う体験活動」等は児童にとって大変貴重な機会となった。

特筆すべき成果がある。それは本実践が児童の「自己効力感」の向上に結び付いたことである。仙台市学習状況調査（R8.4.15 実施）「人の役に立つ人間になりたいと思うか」という発問に対して、今年度の６年児童は約 85%の児童が「そう思う」と回答した。前年度までより約 15 ポイント上昇したことになる（右グラフ参照）。単純に今回の取組が「功を奏した」とは言い切れないが、地域の方との関わりを通して「誰かの役に立ちたい」という思いが強まった児童は確実に増加した。

Ⅵ　おわりに　～「地域の学校」の探求～

本実践は地域の高い「地域力」と学校教育への関心が高い保護者、地域の皆様の協力があって実現したものであるが、本実践の礎（いしずえ）は本校教職員一人一人の熱い情熱と普段の頑張り、そして「チーム南材小」による学校づくりにある。「『地域とともに学校を創ろう』という空気」が学校内になければ「地域の学校」は絶対に実現しない。日々の激務に怯まず教育活動に邁進する本校教職員を心から誇りに思う。「豊かな学びと安心感に満ちた地域の学校」を、今後も全教職員で探求していくことをここに誓い、結びとしたい。